

「貧乏人と金持」・「大歳の客」(AT 750 A)

飯 豊 道 男

1

関敬吾博士のお仕事のうちで私が一番学恩を受けているのは分類のお仕事で、『日本昔話集成』と『日本昔話大成』には過去、現在ばかりでなく、今後も長くお世話になることだろう。この恩恵はばかり知れないものがある。

博士の関心が日本の口承文芸とその分類に向けられていたことはいうまでもないが、博士の著作集を読んでいると英語ばかりでなく、

ドイツ語の文献も大変よく読んでいらっしゃつていて、それが博士のお仕事を形成していく上で影響を与えていたことが察せられる。

参考文献にあげられているものは新旧おしなべて直接、間接に分類にかかわる理論的研究書が多いが、中にはA・シュパーマー編の二冊の大冊『ドイツ民俗学』(一九三四、三五)などの民俗学関係のものが見られる。A・バッハの大著『ドイツ民俗学』(一九六〇)についても周到な紹介をしていらっしゃる。ただドイツ、オースト

リア民俗学のうちの個別の分野や地域研究には立ち入らなかつたよう見えるが、それでもW・ポイカートの『ドイツ中世後期の民間信仰』(一九四二)のような人目につきにくい本も早くから読んでいなくて引用していらっしゃるから、御藏書にはたとえ引用されていなくても多くのドイツ、オーストリア民俗学関係のものがあるのだろう。例えば平凡社の『世界大百科事典』に麻の民間信仰の項を書いていらっしゃるが、これは『ドイツ俗信事典』全十巻(一九二七—四二)をもつていなければ書けない。こういったことをまだ多々あげることができるだろう。

博士は川端豊彦氏との共訳『グリム昔話集』全七冊(角川文庫、昭和二九一三八)のほとんどの話に注をつけ、各話の分析と日本の昔話の類話を示している。これは私個人には『大成』のお仕事に劣らず、くりかえし参照している有難いお仕事なので、ここではそれをたよりに少し書いてみることにする。八七番の「貧乏人と金持」を例にすると、博士の注はこんなふうになつてゐる。

ヘッセン州のシュワルム地方で採集したもの。

この系統の昔話は「猿長者」(集成・一九七)、「大年の客」(同、一九九)をはじめ日本にはきわめて多い。ことに「猿長者」は動物になる点をのぞくと完全に一致する。つぎに参考のためにあげる。

一 汚い旅僧が(大年の夜)金持夫婦の家に宿を乞うが断られる。二 隣の貧乏人夫婦の家に行くと、食べ物はないが快く泊める。三 旅僧は三粒の米と一枚の菜葉で飯をたいてとも食う。四 旅僧が貧乏人夫婦を若返らせる、または金持にする。五 金持が旅僧を探し出してとめる。六 旅僧は金持を貧乏人にする、または猿にして、その財産を貧乏人にやる。八一の「剽輕者」参考照。

『大成』ではグリムの八七番に対応する話に、一九七 猿長者(AT 750)、一九八A 宝手拭(AT 480, AT 750 C)、一九八B 弘法機(AT 750 C)、一九九A 大歳の客(AT 750 A)というよううに、『集成』になかったAT番号がつき、更に比較を容易にしている。

これに従つてもう少しつけ加えてみたい。

一八一五年刊の初版第二巻第一話として初出したこの話は、博士が指摘したようにシュヴァルム地方の話だが、H・レケはそれを特定化し、この地方のトライザ出身のフェルディナント・ジーベルトが語つたものだろうと解釈している。彼はH・ゲルストナーによ

るとドイツ文学に関心をもつてゐる若い神学者だつた。ヘッセンブルーク家の娘が語つた「白雪姫」(五三)の結びには彼の話が寄与し、「ホレばあさん」(二四)や「六人男 世界を股にかける」(七一)の後注にも彼の話が出てくる。しかし牧師となつた人物が神の遊行を語る話をグリム兄弟に提供していた点が殊更興味深いようと思われる。

ヨーロッパでどれほど僧職者が口承文芸の流布に関与したのか、突き止めたいところだが、今の私にはよくわからない。『シャタイヤーマルク州の昔話』(一九四六)の編者P・R・プラムベルガーのように、口承文芸の採話者であり、民俗学者だつた司祭は時々いたが、語り手の司祭もかつてはいたのだろう。

それどころか旅をする僧もいたのだろう。前に私はオーストリアの友人に旅の僧についての研究書がないかと問い合わせたことがあつたが、彼は知らなかつた。しかしK・ハイディング編『オーバーエスターーライヒ州の昔話と笑話』(一九六九)にはこんな個所がある。「誰か『カブチン会の坊さんがこの近くを回つてゐる。あの人ならひよつとして御祈禱で治してくれるかもしだれねえぞ』って言う者がいた。⁽³⁾」こういうカブチン会士は折りにふれて昔話や伝説に登場する。呪文を唱え、魔よけをするカブチン会士のことは南チロル(北イタリア)からも報告されている。⁽⁴⁾ その地の民間信仰を扱つたH・フィンクの『魔法にかけられた土地』(一九八三)にはカブチン会士が薬草に詳しかつたことが出てゐる。⁽⁵⁾ H・レーマンの『年中行事の中の民間習俗』には「カブチン会士、フランシスコ会士は特

別人気があった。村人にとってそういう修道院への道は遠くなかつた」と藁草のことを訊きにいった人たちがいたことを述べている。

P・カウフマンの『オーストリアの習俗』（一九八二）は、巨大な頭部をもつた二人の小人が登場するタムスヴェーケのサムソン行事にふれ、「タムスヴェーケではこの奇妙な習慣の説明がつくらしい。そこでは一七世紀初めに何人かのバイエルン出身のカプチン会士が、

イエズス会士とともに芝居好き、行事好きで知られる修道会の人たちが住みついたといわれる⁽⁷⁾」といつていて、カプチン会士が旅をしていたことがわかる。

南チロルでは三王来朝を記念する御公現の祝日（一月六日）を前に、カプチン会士たちが三王、C+M+Bや年号をチョークで戸口に書きこみ、ささやかなもてなしを受けては、隣りの家に向かつた⁽⁸⁾。私が見たオーバーライヒ州（一九七四）とザルツカンマーグート（一九八六）の例では、年の暮れから一月五日までの間に、どちらの村でも三人の娘がそれらしい扮装をして家々を回っていた。それをカプチン会士がやっていたというのである。こういう聖職者は近寄りがたい印象があるが、思いの外人々の生活に密着した、親しみ易い人たちでもあつたらしい。神や聖人の遊行はこんな聖職者を通して語られたこともあつたのかもしれないという気がする。

グリムの「貧乏人と金持」は遊行の神が金持ちに一夜の宿を乞うと断られ、貧しいものが泊めてくれる話である。翌朝神に三つの望みをといわれ、男は極楽往生と生きている間違者で毎日要るだけの

食べ物にことかかないようにと望む。これは悲惨な死と食料不足による悲劇が少なくない昔話の世界では決して遠慮がちな願いとはいえない。むしろ夢みていたことがまのあたり実現するのだといってもいい。ところが神は自分の方から古い家の代りに新しい家も建てやろうといいだし、ここに三つの願いが満たされる。こうして貧しいものの家運が上昇する。

一方、不信心者の金持ちは事情を知つて馬を追いかけ、三つの望みをかなえてもらうことにしたが、途中、馬が棒立ちになつて「首の骨でも折つてしまえ」といつたため、第一の願いがかなつて馬が死ぬ。彼はやることなすことうまくいかず、馬の鞍を背負つて帰り道につくが、「脣近いお天道さまがかんかんてりつけて、暑くはなるし氣がむしゃくしゃして來」て、つい、「女房の奴が家での鞍にまたがつて、下りられねえといいや」と口走つてしまふ。帰ると、果たして女房が「鞍の上へすわりこんで、下りることができないので、わあわあ泣いて大騒ぎをしている」。こうして彼女を鞍から下ろすことで三つの願いが終る。

AT 750 Aは三〇〇番から始まる本格昔話の三〇〇番から七四九番までがA魔法昔話と分類されているのに続く、B宗教昔話（七五〇一八四九）の最初に位置している話型で、いかにもそれにふさわしい信仰を促し、不信心を戒める話である。

貧しいものの上昇と金持ちの下降を描くが、語りの力点はどちらかといえば後者に置かれている。もし語りに聖職者が介在していたのであれば、もっと信仰の功德を強調しそうだが、そうなつていな

いのはこれを語り伝えたのがむしろ俗の人々が多く、金持ちの不運をいい気味と思う人たちの間で長く伝承されてきたためかもしれない。

というのも金持ちの災厄が馬によって象徴的に表現されているからである。オーストリアの小農や村の日雇いの家に生まれた人たちの思い出話には馬が出てこない。彼らの家で飼っていたのは山羊とか豚で、精々が雌牛一頭なのである。⁽⁹⁾ 馬はあくまでも金持ちのものだった。そればかりでなく聖書を見れば馬は本来キリスト教になじまない動物だったのがわかり、追っ手がこの異端の動物で神を追いかけても神から幸運を得られるわけがなかつたのである。彼の挫折は初めから目に見えていた。

ドイツではグリムから百年後の一九一六年に出たラインラントの昔話を集めた本にもこの話の類話がある。そこでは貧しい家が「わらぶき屋根の小さな家」と表現され、主にコーヒーをわかし、わらのベッドを用意するなど細部的具体性が違う。しかし大筋は変わらない。天氣も「とても暑かった」という。

二話とも、夏の話になつてゐるのである。比較される日本の「猿長者」はそれに対しても冬の話になつてゐる。『大成』では岩手県某地の採話（聴耳・二四五）だけが「八月十五日のお月様に上げる団子を作る米を隣の長者に借りに行く」と夏になつてゐる。あとは冬の話ばかりなのにドイツでは二話とも夏の話になつてゐる。そこが対照的だが、双方春や秋の話になつていなかつところが面白い。夏と冬には夏至と冬至があつて、太陽の運行とかかわりの深い季節だか

ら、この話の背後には太陽神信仰が隠れているかもしない。神圣な存在の遊行も多分季節と無関係ではないだろう。

グリムでは神へのもてなしにじやがいもを山羊の乳で煮て出している。ヒトラーの時代でも人々はそんな物を食べているからこれは当時の庶民の日常的な食事を反映しているのだろう。スペイン人が一五六〇—一五七〇年ごろヨーロッパにもたらしたじやがいもは、ドイツではそれから間もない一五八八年にまず珍奇な植物として栽培されている。その後一七世紀の三〇年戦争（一六一八—一六四八）を契機にその存在を知られるようになり、一八世紀に入つてからは一般化し、後半の一七七〇年の飢饉によつてさらに関及する。だから一九世紀初めの話の時点から見れば麦とは段違いに新しい食物なのである。しかしじやがいもはすぐれた救荒作物としてヨーロッパ各国で大いに作付けが奨励された。⁽¹⁰⁾ 話の家ではだからまたくありあわせの物を出したに過ぎない。それに対し今世紀のラインラントの話でコーヒーを出すところには期せずして時代の移り変わりが出てゐるのだろう。

客へのもてなしのもう一つはベッドである。夫婦はベッドを提供し、自分たちはゆかにわらを敷いて寝る。これが最高のもてなしなのである。今世紀の類話ではベッドが「わらのベッド」になつてゐるが、わらのベッドも当り前のベッドだった。シュヴァルム地方に隣接するフルダ市近くで一八八九年に生まれ、ろうそく工場、鉄道、郵便局で働いた一庶民の老人は、『穴という穴がビンボーといつた』という自分史で、「私たちはわら袋の上で寝た。それは毎年新しい

わらで詰め変えられた」と一九世紀末の子ども時代の思い出に書いている。⁽¹²⁾「第一次大戦中に生まれた」というオーストリアの助産婦は、子どものころを振り返つて、「ベッドはどうもろこしの毛を下敷にし、その上にからすむぎのこまかんもみがらを詰めたジュート⁽¹³⁾（黄麻）の袋がのつていた」と『助産婦の生活から』に書いている。話に出てくる彼らは気取らず、ふだん通りの姿で、しかし誠意をこめてなすのである。

食事がもてなしとなるのはドイツと日本で共通しているが、日本の話では寝床のことが出てこない。これは日本では人を家にあげればふとんを敷くのも簡単だが、ドイツでは家の中にベッドの余裕などそうあるものでないのであって、干し草の中や家畜小舎に泊めるのでなければ、客を泊めるのは大変なのである。「両親は一つベッドに、子どもたちも一つベッドに寝ていた」というような事情があつた。こういう個所には彼の家屋構造の違いが出ている。

ドイツの話が日本の話に似ているといつても、そこには「猿長者」にあつた若返りのモチーフがない。また動物への変身のモチーフもない（AT 750 Cなら最後に雌牛への変身がある）。

ルゼ・カーリッシュおばあさんが語った「ハンスとリーゼ」では、貧しい夫婦が小さい部屋のストーブのへりにある腰掛けに座つて体をあたためている。女房のリーゼが「妖精がきて私の願いを聞いてくれたらね」というと、不意にドアがあいて妖精が三つ願いをかなえてやるといつた。その晩彼女はうれしくて眠れない。あくる日、かまどでじやがいもスープをこしらえていると、夫のハンスがなべをのぞく。彼女がなべに焼きソーセージが一本入つてたらねといつたかと思うと、それが入つている。つまらぬことを願つたのに怒つたハンスが、そんな物、お前の鼻にくつつけいいというと、それが彼女の鼻にくつついて取れなくなつてしまふ。やむなくそれを取つて三つ目の願いもかなう。こうして二人は前と変わらぬ貧しい暮らしを続けるのである。⁽¹⁵⁾

これは語りの場の笑い声が聞こえてきそうな話である。外の世界の人間に向けられた嘲笑というより、仲間うちの失敗を面白がる内々の笑い声である。この話には貧富の対立がなく、貧しい一家族だけが登場する。

ところでこの話ではグリムと一変して「大歳の客」と同じ冬の話になつてている。

ラトヴィアにも「ライマが三つの願いをかなえる」という類話がある。⁽¹⁶⁾これも冬の話である。冬の晩、ライマが小さな農家に寄つてあたたまる。家を去る時ライマが女房に三つ願いをいうがいいというので、彼女がかまどの上にソーセージが焼けてたらいのですが、というと、もうそこにソーセージが焼けてぱちぱちいつている。こ

れを見て亭主が金貨とか財産をほしがればよかつたのにと文句をつけて、こんな物お前の鼻にくつつけばいいのだといったため、女房の鼻にくつついて取れなくなる。これを取つて三つ目の願いもむなし終る。

『ラトヴィアの昔話と伝説』全一五巻（一九一五—一九三七）にのつていた話だが、イギリスでは一九世紀半ばに出た『ノースハンブトンシャーの民間伝承』（一八五二）に「三つの願い」という類話がある⁽¹⁷⁾。

大きな森に貧しい木こりが暮らしている。彼が古いオークの大木を切ろうとすると、妖精が現れ、願いを三つかなえるから切らないでくれ、といつて消える。彼はうちに帰つて火のそばに腰を下ろし、空腹を抱えて思わず、一連のブラッドソーセージがあればな、といつたかと思うと、うまそうなすばらしいブラッドソーセージが暖炉から一連、さがつてくる。女房がわけを知つてどなる。ばかねえ、あんたつて。そんなブラッドソーセージなんかあんたの鼻にくつつけばいいんだわ。おかげで彼の鼻は一連のソーセージ分長くなり、いくら引つぱつても取れず、三つ目の願いに取つてもらう。

ラトヴィアでライマが登場するが、これはラトヴィアで崇拜されている幸運と運命の女神で、人間の創造神だった。誕生、結婚、死を司り、女性のお産を助け、ライマがいる家だけ幸運があるという。ライマはギリシア神話のモイラや北欧神話のノルンのように三姉妹になることもある⁽¹⁸⁾。

1の話の神がキリスト教の神だったのに対し、2では妖精やライ

マというキリスト教化されていない土着信仰の神が訪れるが、幸運をつかんだのも束の間でぬか喜びに終わる。異端の信仰が幸運をもたらさないのは前の話型と同じで、語り手の背後にキリスト教の操作があるようと思える。

冬に福の神が家を訪れるという基本構造は変わらないものの、1の話型と違つて今度は火とかストーブとか、かまどとか、火とそれのかかわる場所がはつきりいわれている。ストーブは、ヨーロッパの昔話では王となる怠けものや愚かものの居場所であり、異常誕生のものが行動を開始するまでいるところである。ストーブと直結するかまどはいまの家の造りを見ているとわかりにくいが、かつては家の中心にあつた。かまどはむきだしで、家中の中は日本の農家のようになつ黒に煤けていた。嫁入りした娘が真つ先に行く、家を象徴する神聖な場所だつた。そこが神が来訪する話の舞台になつているのも偶然ではないだろう。

しかもそこにソーセージが取り上げられている。私が一九八六年にオーストリアのザルツカンマーグートの村で正月を迎えた時、主婦は元日の朝、レモンに爪楊枝で四本の脚をつけ、香味料の小さなちようじの実で二つの目をつくり、口に一枚の銅貨をくわえさせた豚を食卓に飾つていた。それは魚の形をしたクッキーと一緒に大みそかの夕食には各種のソーセージとハムが一種類出た。いつもと代わり映えしないといえども、種類が多く、ハムが出たのが御馳走だつた。パンはらい麦の黒パンでなく小麦の白パンだつた。小パーティのあとに夜食が出た。それは小

さい豚肉の切身と扁豆で、どちらも幸運をもたらす食べ物だと主婦は説明した。豚は年の変わり目と切り離せない縁起のいい食物だった。

一九七四年にいたオーバーエスターライヒ州の農家では、一二月二〇日に豚を一頭屠殺した。豚の屠殺は春とクリスマス前に行われる。同じ州の小農の家にうまれた人も「私たちは自分の家で年に一回豚を屠殺した」と書き、「豚を屠殺した冬だけ、短期間肉があつた」とも書いている。「夏は父だけが肉を食べた」と書いている人もいる。このように以前はどこの家でも気楽に始終肉を食べていたわけではない。『レーン鑑』によると一九世紀ドイツ・ヘッセンのレーン地方では、「肉とソーセージは裕福な家で週に数回食卓に出た」、「貧しい村々ではじやがいもとミルクが主食だつた」そうである。同じ地方のフルダ市の老人が書いた『私の知っている昔のフルダ』には、「縁日のあと、肥えた豚がいるうちでは家庭での屠殺が続いた。その日は午前中から肉が出た。晩には家族全員のために焼きソーセージがぱりっと焼かれた」とある。

ソーセージを食べる機会は冬に多かったのかもしれない。しかも来年の幸運を願つてかみしめるとなれば、それはもつと切実だつたろう。それがこの話ではこつけいな、やや好色な趣きの話になつてゐるのである。

こういう豚が出てくるのはヨーロッパが農業牧畜文化圏だからだろうが、年の暮れに来年のよい運を願う気持ちは日本と同じで、私がいたザルツカンマーグートの家では大みそかの夕食前に「悪靈は

らい」をやつた。主婦が炭火で薰香をたき、塩、水をみたしたガラスのコップにもみの小枝をひたしては振り、十字を切つて各部屋をきよめて歩くのである。私はろうそくをともした燭台をもつて一緒に歩いていた。この「悪靈はらい」は一二月二四日にも行われ、一月五日の夜にも行われる。大みそかの夜にはスプーンに入れた鉛の小片をアルコールランプでとかし、水中にあけて凝固した形で来年の運勢を占うこともやつた。この時期は結婚占いや天候占い、作物の出来の占いなど、さまざま占いが行われる。インゴボルク・ヴェーバー＝ケラーマンは『クリスマス』という本の中で、聖トーマスの祝日（一二月二一日）の結婚占いにふれたあと、「こういうはつきりと性的なまじないを唱えるのは奉公する娘たちで、農家の娘もやるということはあまり報告されていない。農家の娘の将来はまず安泰で、農家の大きさに見合う相応の家庭との結婚がきまつていた。それに対し奉公人の娘の将来はできそうなあたりで控え目に考えても不明だつた。だからそういう娘は新しいところでの暮らしの運命を、つい伝統的なまじないを使って幸せな方向にもつていこうとしたのである」といつていて。占いにしても行事にしても苦しい状況に置かれているものほど真剣にならざるを得ない。ソーセージの話がもつにがいおかしみもこういう観点から見ることができるのでないか。

これまで取り上げた話ではくつつくというモチーフが共通している。馬の鞍が女房の尻にくつつき、ソーセージが女房あるいは夫の鼻にくつづいて離れなくなるというように、呪文を口にするところいう不思議な現象が起る。日本の「猿長者」でも岡山県の類話（蒜山・二〇六）では鞍がかかあの背にくつつく。

イスラエルのティチノ州の話では死神が木から降りられなくなる。遊行しているキリストとパウロが、泊めてくれたミゼリア（貧乏）という老婆に二つの望みを訊くと、うちの前のりんごを盗むものがいてちつとも食べられないから、あがつたら最後私が許さない限り降りられないようにしてほしいという。それで降りられなくなつたのが死神で、彼は彼女が死なないようにしてやつと降ろしてもらう。⁽²⁴⁾だから今に至るまでミゼリア、貧乏は死なないのだという。木に登った死神が降りられなくなるモチーフは、グリム八二番の「道楽のハンスル」（AT 330 A）にも出てくるが、「大歳の客」に見られる死がこんな形で表われているものがあるのである。

亞麻のすき櫛にくつづく話もある。今世紀初めにデピニーがオー

ストリアのオーバーエスターイヒ州で採話した「三つの願い」⁽²⁵⁾がそれで、キリストとペテロの旅になつてゐる。ところが金持ちの農民が泊めてくれないので、彼らは隣りのうちにいく。このうちでは借金をたくさん抱えていたが、りっぱな家と借金を払えるかねと死

後は天国という三つの願いをかなえてもらう。金持ちの女房がまねしてとつさに亞麻のすき櫛を願う。亭主は安易な願いに怒り、すき櫛なんてお前の尻にくつづければいいとさけぶ。とだんにそうなつて女房が痛がる。それで最後の願いに取つてもらう。亞麻のすき櫛は板に剣山のように釘を打ちつけた物だから痛いにきまつていて。

ブルゲンラント州の六五歳のクロアチア人のおばあさんは、一九六四年に鞍がくつづく型のほか、こんな話もしている。遊行のキリストとペテロが貧しい女のところに泊まる。翌朝立ち去る時、二人はおかげを払えないが、今日始める仕事を祝福してあげようという。女が亞麻布（リネン）をはかると、はかつてもはかつてもなくならず、一日じゅうはかることになった。隣りの金持ちの女がこれをねたんで一人を泊め、仕事を祝福してもらうことにしたのはよかつたが、一日じゅうリネンをはかるように先にトイレにいこうと思つて、用をたした。そのため彼女は一日じゅうトイレに座つていなければならなくなつたという。このあたりでは今でもトイレが外にある農家がある。

これも AT 750 A である。大成一九八Bの「弘法機」（AT 750 C）のように織り物にかかる型が出てきたが、この織り物は必ず亞麻布になつてゐる。

イスラエルのレトロマニス語の昔話「フリウリ語（語の方言）」の主と聖ペテロ（一九五六年刊）⁽²⁶⁾では、欲ばかり女に断られた二人が貧しい小さな家にいくと、その家の女は火のそばで糸を紡いでいる。彼女は二人に火に当れといつて糸を四本くべてくれる。ブルゲン

ラントの話は季節にふれていなかつたが、ここでは明らかに寒い季節の話になっている。彼女はスープと豆とりんごの食事を出し、二人を干し草のところにつれていく。主は帰りぎわ、今朝の初仕事が一日続くようになると祝福してくれる。そのため彼女が機を織ると亞麻布が軒樋の下まで届くようになる。欲ばり女は機を織るより先に用たしにいったので、一日じゅうトイレの出入りを繰り返した。

この型ではこんなふうに機を織る話がみつからない。いつも布の寸法をはかる話になつていて、先にあげたベツサラビアからドイツに引き揚げたエルゼ・カーリツシュは、母がよく語つた話だといつてこんな話をしている。旅の若者が農婦に一夜の宿を乞い、断られる。隣りの日雇いの家にいけといわれて彼がいくと、そこは子だくさんだつたが、家に入れる。ステープを出し、翌朝はおかゆを出してくれる。この家を出していく時、彼は朝の仕事が一日じゅう続くようとに祝福する。彼女が夫のシャツを切ると、布がいつまでもなくならず、はさみが切れなくなつて娘に隣りに借りにいかせる。事情を知つた農婦が今度は若者を泊めるが、初めにトイレにいつたので、一日じゅうそこにしゃがんでいなければならなかつたという。⁽²⁴⁾

レトロマンス語の話は語り手の記述がないが、ブルゲンラントのもこれもともに女性が語つている。きっと語りの場のみんなが声を出して笑いあつた話なのだろう。

もつと率直に語る話もある。いずれもドイツの話で、『ボヘミア森北部の民間文芸』（一九五七）に出ている一九五〇年の採話では、遊行の主がある晩、ある町の金持ちの女に宿を乞い、隣りにいけと

断られる。その小さな家に泊めてもらつた主は、翌朝彼女が最初に考え、することがかなえられるだらうといつた。彼女が何気なくシャツの亞麻布をはかつたので一日じゅうそれをはかり続けることになり、家が亞麻布でいっぱいになる。金持ちの女がそれを知つて主を追いかけ、何を望めばいいか一晩じゅう考え、翌朝かねを数えることを思いつく。しかしその前におしつこをしてこようと思つたのが運のつきで、彼女は一日じゅうおしつこをしていなければならなくなる。これも女性の語り手が母から聞いた話である。⁽²⁵⁾

『オーバーブアルツ・ボヘミア国境地域の民間文芸』（一九六五）にのつている一九六三年の採話「初仕事が祝福される」も、語り手の農婦が子どものころに聞いた話で、農民に片づぱしから断られた聖ペテロが、村はずれの、貧しい女の小さな家にいく。ここにはじやがいもしかない。ペテロはあしたの朝お前が始める仕事を祝福しようというが、彼女が氣にとめず娘のためにと物差しで亞麻布をはかりだすと止まらなくなり、晩までやつて家じゅうが亞麻布で一杯になる。わけを知つた隣りの女がペテロを追いかけ、とびきりの御馳走を出し、祝福をしてもらう。一晩考えたあげくかねを勘定することにしたが、まずおしつこをしにいったので、一日じゅうおしつこをするはめになる。⁽²⁶⁾

同じ編者ながら前者は「笑話」、後者は「聖徒伝説、聖徒伝説的伝説、起源伝説」の一つに分類されている。

『グリム以後のドイツの昔話』（一九六四）にのつている「小さな年寄り」は、一九世紀に出たヴォルフの『ドイツ昔話集』（一八四

五) から取つた話で、語り手は不明である。ある晩、小さな年寄りが村にきて農婦に、とても外が寒くて眠れないから泊めてくれといふが断られる。そこで貧しい家にいくと、女はミルクがゆをこしらえ、中にパンも入れてくれる。そして彼女自身は土の上に眠る(だから年寄りはベッドに寝たのだろう)。翌朝彼女はおかゆを作つてくれる。年寄りは今朝の初仕事が一日続くようにといつて去る。彼女がその言葉を忘れてシャツをこしらえる亞麻布をはかると、真つ暗になるまではかり、部屋が亞麻布で一杯になる。

それを知つて隣りの女房が年寄りに上等なベッドを用意し、朝はコーヒーとビスケットを出し、初仕事が一日続くようにしてもらう。やはりかね勘定をしようとするが、子豚が鳴くので水を汲んだのがきつかけで大水になり、彼女も家も流されてしまう。これはニーダーライン地方の話で、その他の類話では彼女がかね勘定の前におしつこをしようと家の裏手にまわり、一日しやがみ続けて家の裏に大きな湖ができる。それが今でもあるといふ。⁽³¹⁾

ドイツばかりではない。リトニアの「一日の初仕事」⁽³²⁾でも年寄りが——神が年寄り姿になつてといわれているが——登場する。村の金持ちがその年寄りを泊めずに入れる。最初に手がける仕事が一日続くようといつてくれた年寄りの言葉を彼女は気に止めない。長持ちにしまつておいた亞麻布を出し、子どものシャツをこしらえようと寸法をはかると、亞麻布が一杯にあふれる。

それと知つた金持ちの農民が早速まねをして祝福を得るが、かね勘定を始める前に家を出て、日が暮れてからやつと帰つてくる。あと

うが断られる。そこで貧しい家にいくと、女はミルクがゆをこしらえ、中にパンも入れてくれる。そして彼女自身は土の上に眠る(だから年寄りはベッドに寝たのだろう)。翌朝彼女はおかゆを作つてくれる。年寄りは今朝の初仕事が一日続くようによつて去る。彼女がその言葉を忘れてシャツをこしらえる亞麻布をはかると、真つ暗になるまではかり、部屋が亞麻布で一杯になる。

にはかもが泳げるような池ができていた。この話はほかのと違つて男がおしつこをしている。リトニアでは人気がある話型で類話が三二あるという。

一九世紀末のフランスの話は「聖マルタン(マルティヌス)の奇蹟」といつて、遊行するのが使徒でなく聖人になつている。この聖人は四世紀のハンガリー生まれの人でもつぱらフランスで布教したが、全ヨーロッパで尊敬されている。彼がリヨン地方にやつてくる。真冬のことだ。いい家にいくと歯のない老婆が現れ、聖マルタンが飢えと寒さで死にかけているといつたのに、はねつける。彼が崩れかけた貧しい小さな家にいくと、子だくさんの日雇いはすぐに入れてくれ、火にまきをたし、ベーコン入りのキャベツのスープを出しててくれる。彼は雌牛のそばのわらの上で眠る。翌朝、望みを訊くと、主婦はあしたの朝始める仕事が一日続けばいいのですが、と答える。次の日の朝、農婦がとうもろこしのおかゆを食べ、嫁入りの時から取つておいた亞麻布をはかりだすと一日じゅうそれが続き、家も納屋も亞麻布であふれる。歯なしの老婆は後悔して聖マルタンをむりやり泊め、やはり朝の仕事が一日続くようにしてもらう。が、亞麻布でなくかね勘定をしようとする、用たしをしたくなる。しかしやがむとそこに小さい流れができる、小川ができる、それが急流となつて石も木も畠も押し流す。その後、川は穏やかになるが、それでも時々あばれるといふ。

こんなふうにヨーロッパ各地でほぼ同じような話が一九世紀から現代まで伝承されているのである。ただエストニアの一九世紀の

「物乞いと金持の農婦」の結びはちょっと違う。結びまでの展開は同じで、金持の農婦が物乞いを追い払い、子だくさんの貧しい未亡人が彼を泊める。その翌朝彼女が子どものシャツづくりの亞麻布ばかりにとりかかると、一日続く。一方、金持の農婦が望みの仕事にとりかかろうとする、胃を軽くする必要を感じ、彼女は日が暮れてからようやく部屋にもどれる。どうやら大の用たしだったらしい。そこだけが違う。

これらの話では再び貧しいものと金持の対立が見られ、また昔話は貧しいものをひいきにする。これは語り手と聞き手がどういう人たちだったかを暗示していよう。

それでも昔話は汚ない話が好きである。こういう結びの汚なさに出くわすと、世間の人たちがヨーロッパの昔話、特にメルヘンという名でもつてゐるイメージと随分かけ離れているが、これが伝承昔話の実相である。

こういう無遠慮さ、土くささは、話の説明の省略、飛躍とともに語りの場に集まる人たちが属している社会と同質性、彼らの間の韁帶の強さがうかがえる。話の女性の水の大量放出は遠慮会釈もない。おおらかで聞き手の間に快い笑いをまき起こしたろう。結びにきて、語り手も聞き手も爽快なカタルシスを味わうのである。女性がこの話をいやがつていなかつたのは語り手がわかつてゐる場合、女性の間で語り継がれていた事実が示してゐる。糸紡ぎ部屋に女性たちが集まつて仕事をした時にも多分語られてゐたかもしない。

しかし話に出てきた当人は意外な事の成り行きに呆然自失しただ

ろうに、案外けろつとして帰つてくる。へとへとになつたかもしないのに、どの話でも倒れこんだといつていい。倫理的な見方を離れればこの悪役には捨てがたい魅力がある。

昭和二八年に出た『国学院雑誌』五十四卷一号に、鈴木正彦氏の「歳の夜の訪客」という「大歳の客」についての行き届いた論考がある。3の初めにヨーロッパの話にくつづくが目立つと書いたが、氏はすでに死と富の関係を「取付く引付く」から解明できないかと論じ、次いで水を問題にしてゐる。ヨーロッパの話では火も死も水も日本の話とは趣きを異にするが、こうした要素が話型を組み立てる骨格となつてゐる点では共通してゐる。

貧富の立ち場をキリスト教と異教に置き換えると、水はふざけた小水でなくなる。ここにはキリスト教の規範に拘束されない不敵な幻想があつて、小水を放つものは困つた仕草を見せながら大胆に池を作り、湖を作り、川を作り、時にその川は暴れまくるのである。

家に組みこまれない自然が水に生きているのである。

水は生命をはぐくみ、うみだす。源泉を女性が盛大におしつこをして誕生させてゐるのは愉快であり、自然である。男にはできない。野に水が湧き、流れ、新しい世界が始まる。それは豊饒の時が始まりである。家中では亞麻布があふれ、そこにも豊饒の時が始まつた。内と外が女性を通して豊饒にわきたつ。

それが冬というものなのである。出発の胎動と開始があつて、この話は冬の話であることによつて生きてくる。かつてヨーロッパでは一年は夏冬の二季だつた。それが三季、四季と分けられるように

なる。かつては夏の生と冬の死があつたのである。冬は死者と靈魂の時で、生の世界に属するものは彼らを憚り、静かにして過ごした。鎮魂に努め、残酷なものが一転して守護し、幸運をもたらすものになるように願つた。この季節に神々が遊行するのは当然なのである。この季節こそ神々の遊行にふさわしいのである。

それでも水を産み落とした女性はやれやれというような顔をし、また何食わぬような顔をして元の世界に、家にもどつてくる。したたかなものだが、語りの場は彼女を笑いものにして喜ぶ。日常世界にもどれば彼女は単に強欲でしきじつた女性に過ぎない。もう一軒にあふれる亜麻布が語りの場の執拗な関心の対象となる。

亜麻は紀元前四世紀のエジプトで栽培された古い歴史をもつ一年生草本で、ヨーロッパでも新石器時代のスイスの杭上家屋の遺跡からもひもや網が発掘されている。現代オーストリアの農家で奉公していた女性たちの一人が亜麻の種は水車場でしばつてもらって油にして、料理に使つた。油かすは雌牛や子牛の餌にし、牛が病氣の時に水にとかして与えた。人間の百日咳の時にも朝晩の二度胸にすりこんだ、と思ひ出に書いていよいよ、古来から亜麻は衣料の原料と食料の二つの用途をもつものとして栽培されてきた。私が一月五日の夜、御公現の祝日の前夜にオーストリアの村で見たペルヒテといわれる女性の妖怪たちは、顔の前面を麻の束でおおつていた。それは宗教的な行事にも、儀礼にも使われてきたのである。

一九世紀の農業ハンドブックは亜麻の栽培法を詳しく説明しているが、これは多肥料を要し、手間のかかる植物だった。いつ種をま

くか、いつ収穫するかは主婦が助言したという。女性にかかわりの深い植物だった。糸に紡ぐのは女性の仕事だったが、織るのは男性の仕事でもあった。⁽³⁷⁾ 女性が機を織っている話があつたが、家庭では女性もやつた。私は戦前ウクライナに入植していた家族出身で、今はドイツに暮らしている老人から彼の母が機を織っていた、機は嫁入り道具に欠かせなかつたと聞いたし、オーストリアのシュタイヤーマルクの山村で大きな屋根裏にかつての農具や民具を保存している農民に会つたことがある。ここにもいろいろ亜麻関係の道具や機があつた。

DA SCHAU HERというこの地方の民俗研究誌の最新号によると、亜麻は冬の数ヶ月に農婦や娘、奉公している女たちによって紡がれ、そのあと農家を渡り歩く渡りの織り工によつて織り物に仕上げられたという。⁽³⁸⁾ ボヘミア森のあたりではこういう渡りの織り工は一軒に四週間から六週間とどまつていたといふ。⁽⁴⁰⁾ ところがグリム兄弟が少年期を過ごしたヘッセンのベルクヴァインケル地方の「ほとんど忘れられた職業」⁽⁴¹⁾ というそれらを調べた本は「織り工」の項の初めに「亜麻織り工は毎年二頭の豚を屠殺する。一頭は盜んだもの、もう一頭は彼のものでない」など、織り工たちの生活の貧しさを如実に示す嘲笑の歌が歌われていたことを紹介している。彼らの生活が苦しかつたのは紡績機械の発明改良（一七六四、一七九三）があつたからで、ベルクヴァインケル地方で紡績工場ができたのは大分遅く、一八六五年のことだつた。

亜麻布作りが衰えたのはどこでも一九世紀に入つてからだつた。

木綿の登場も亞麻に大打撃を与えた。それでも亞麻は第一次大戦後、第二次大戦中に作付面積が一時的にふえているが、第二次大戦後の人工織維の増加によって決定的に意味を失つた。⁽⁴²⁾ 昔話の中に木綿が登場せず、亞麻ばかりが登場するのは古い時代の記憶が鮮明で、それがよく使われていたからなのだろう。

それに、『私の父は木こり、山の農民だった』に「子どもたちにはほとんど服がなかつた。靴は全然なかつた」⁽⁴³⁾とか、『農業労働者の子ども時代』に、「子どもたちは一二歳とかもつと早くから牧童や子守りとして農家にいかなければならなかつた。ただ、食べさせてもらえるのと、年に一度亞麻のシャツ一枚をもらえるために」と思い出に書いているのを読むと、こういう話の亞麻布が一杯にあふれるというのがどんなに途方もない喜びと虚しさだったかを考えずにはいられない。

また麻には亞麻のほかに大麻がある。大麻の方が栽培が密植で楽だつたが、製品の質は落ちる。この大麻も昔話には出てこない。それはなぜなのか。ヒントを与えるのは昔話の女性がシャツを作ろうとして亞麻布の寸法をはかつてしたことである。『助産婦の生活から』では子どものころの服についてこう書いている。「着る物は主に自家製の麻で、大麻か亞麻で織つたものだつた。大麻では男のズボンや上着⁽⁴⁴⁾をこしらえた。亞麻では肌着類、女の衣類、ヘッド用布類をこしらえた」と。こんな事情で昔話に亞麻ばかりが出てくるのかもしれない。

こういう話が歳越しの話とわかれば申し分ないところだが、そう

はいきそろもない。仕事の禁忌があるのである。東プロイセンの例だが、パウロの回心の祝日（一月二五日）、聖母マリアお清めの祝日（二月二日）には糸紡ぎをしてはならないし、クリスマスから一月五日にかけての一二夜には、亞麻にかかるどんな仕事もしてはいけないことになっている。⁽⁴⁵⁾ このタブーはもつと多く地方でも行われていたかもしれない。

同じ話型といわっても遠く離れた国々の話の比較は難しい。なるべく生活に入つて考えてみたいと思うのだが、うまくいかない。

これまであげた話よりもスペインのカタロニアの「罰と報酬」（cf AT 750⁽⁴⁶⁾）の方が「大歳の客」（一九九A「欲の深い兄」AT 750 A）に近いかもしれない。ペテロとヨハネが金持ちに、泊めたら何をくれると訊かれ、畑にある宝のあり場所を教えると答える。二人は教えたが、この豚小屋には泊まらない。金持ちが畑の柳の木の右側を掘ると、雀蜂の巣が現れる。癪にさわつた彼はそれに亞麻袋をかぶせ、二人が泊まつた貧しい男の台所にほうりこむ。ところがペテロが十字を切ると雀蜂が金貨に変わつて、一家は貧乏と縁が切れたというのである。

この夫婦が幸運を得たのは二人の年寄りをすぐに愛想よく家に入れ、食べる物飲む物（具体的にはいわれていない）を出し、自分たちの寝室を提供したからである。

遊行神の話はまだいろいろあるが、そのうちの「ごく一端にふれた。

- (11) Meyers Großes Konversations-Lexikon. 1909. Bd 10. S. 69f.
- (12) Krieger, Bonnaventura : Die Armut pfif aus allen Löchern..... Schiltz 1980. S. 23.
- (13) Horner, Maria : Aus dem Leben einer Hebamme. Wien-Köln-Graz 1985. S. 16.
- (14) a. a. O. S. 16.
- (15) Cammann, Alfred : Deutsche Volksmärchen aus Rußland und Rumänien. Göttingen 1967. Nr. 87.
- (16) Ambainis, Ojärs : Lettische Volksmärchen. München 1989. Nr. 82.
- (17) Briggs, Katherine/Ruth Michaelis-Jena : Englische Volksmärchen. Düsseldorf-Köln 1970. Nr. 40.
- (18) Lurker, Manfred : Lexikon der Götter und Dämonen. Stuttgart 1984 S. 183.
- (19) Häuslerkindheit. S. 207. 209.
- (20) a. a. O. S. 197.
- (21) Höhl, Leopold : Rhönspiegel. Würzburg, Bayern, Wien 1892. S. 92, 91.
- (22) Schmitt, Edmund : Erlebtes Alt-Fulda. Fulda 1978. S. 79.
- (23) Weber-Kellermann, Ingeborg : Das Weihnachtsfest. Luzern und Frankfurt/M. 1978. S. 18.
- (24) Todorović-Strähl/Ottavio Lurati : Märchen aus dem No. 56.
- (∞) Bridder Grimm : Kinder- und Hausmärchen. Bd. 3. (Hrsg. Heinz Rölleke) Reclam 3193. 1983. S. 480.
- (∞) Gerstner, Hermann : Brüder Grimm. rororo. S. 39. Leben und Werk der Brüder Grimm. Gerabronn-Craisheim 1970. S. 124.
- (∞) Haizing, Karl : Märchen und Schwänke aus Oberösterreich. Berlin 1969. Nr. 83. ■■■ 『ハーベルトス』
- (∞) Fink, Hans : Verzaubertes Land. Volkskult und Ahnenbrauch in Südtirol. Innsbruck-Wien 1983. S. 39, 149, 167.
- (∞) a. a. O. S. 55, 280.
- (∞) Lehmann, Heidi : Volksbrauch im Jahreslauf. Miesbach 1964. S. 83f.
- (∞) Kaufmann, Paul : Brauchtum in Österreich. Wien/Hamburg 1982. S. 143.
- (∞) a. a. O. S. 34f.
- (∞) Weber, Therese (Hg.) : Mägde. Lebenserinnerungen an die Dienstbotenzeit bei Bauern. Wien-Köln-Graz 1985.
- Weber, Therese (Hg.) : Häuslerkindheit. Autobiographische Erzählungen. Wien-Köln-Graz 1984.
- (∞) Ranke, Kurt (ed.) : Folktales of Germany. Chicago 1966. No. 56.

- Tessin. Köln 1984. Nr. 37.
- (25) Märchen und Schwänke aus Oberösterreich. Nr. 160.
- (26) Gaál, Károly : Erzählgut der Kroaten aus Stinatz. Wien 1983. S. 25, 21.
- (27) Uffer, Leza : Rätoromanische Märchen. Düsseldorf-Köln 1973. Nr. 54.
- (28) Deutsche Volksmärchen aus Rußland und Rumäniens. Nr. 145.
- (29) Benzel, Ulrich : Volkserzählungen aus dem nördlichen Böhmerwald. Marburg 1957. Nr. 221.
- (30) Benzel, Ulrich : Volkserzählungen aus dem oberpfälzisch-böhmischem Grenzgebiet. Münster 1965. Nr. 114.
- (31) Zaunert, Paul : Deutsche Märchen seit Grimm. Düsseldorf-Köln 1964. Nr. 46.
- (32) Range, Jochen D. : Litauische Volksmärchen. Düsseldorf-Köln 1981. Nr. 50.
- (33) Soupault, Ré : Französische Märchen. Düsseldorf-Köln 1963. Nr. 63.
- Soupault, Ré : Französische Märchen. Neueausgabe. München 1989. Bd. 2 Nr. 26.
- (34) Löwus of menar, August v. : Finnische und estnische Märchen. Düsseldorf-Köln 1962. Nr. 58.
- (35) Mägde S. 45.
- (36) Löbe, William : Handbuch der rationellen Landwirtschaft für praktische Landwirthe und Oekonomieverschaffter. Leipzig 1863. Bd. 1 S. 499-509.
- (37) Schuchhardt, Wolfgang : Textilien. in : Spamer, Adolf (Hg.) : Die Deutsche Volkskunde. Leipzig 1934. Bd. 1 S. 447.
- (38) a. a. O. S. 450.
- (39) Hein, Waltraud : Faserflachs im Wandel der Zeit. in : DA SCHAU HER. 3/1990/Juli Liezen. S. 4.
- (40) Schuchhardt, Wolfgang : a. a. O. S. 450.
- (41) Kühnert, Alfred : Fast vergessene Berufe. Schlüchtern 1977. S. 267.
- (42) Hein, Waltraud : a. a. O. S. 3.
- (43) Waß, Barbara : Mein Vater, Holzknecht und Bergbauer. Wien-Köln-Graz 1985. S. 25.
- (44) Häuslerkindheit. S. 28.
- (45) Aus dem Leben einer Hebamme. S. 16.
- (46) Lemke, Elisabeth : Volkstümliches in Ostpreußen. Mohnungen 1884 (1978) S. 104.
- (47) Kartlinger, Felix u. Johannes Pögl : Katalanische Märchen. München 1989. Nr. 45.